

令和6年度文部科学省委託事業  
「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

国立立山青少年自然の家 教育事業



# チャレンジ& チェンジ! 2024 報告書

— 海拔0m~3,000mへの挑戦 —





# はじめに

「チャレンジ&チェンジ」は、平成20年度から国立立山青少年自然の家で始まった長期キャンプ事業で、令和4年度からは、文部科学省の委託事業「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」として採択され、令和2年度の中止を除き、令和6年度で16回を迎えました。

本事業は、富山・立山の雄大な自然にふれながら、海拔0メートル(富山湾)から3,000メートル(立山山頂)を10日間で自力踏破するという、勇猛果敢なキャンプです。

ねらいは、「雄大な自然の美しさや厳しさを体験すること(チャレンジ)で、豊かな心を育む(チェンジ)」、「自分の課題に挑戦(チャレンジ)し、できる自分・新しい自分になる(チェンジ)」、「仲間とともに、つながりを大切にして活動に取り組むこと(チャレンジ)で、課題解決力と主体性、社会性を伸ばす(チェンジ)」ということです。

本事業の実施計画の作成にあたっては、富山国際大学子ども育成学部長の松山友之教授に、プログラムの構成や振り返りの在り方など、計画全般にわたり、多くのご助言を頂きました。

また、実施にあたっては、国立登山研修所の黒川専門職、立山ガイド協会の登山ガイドである大塚様、富山県[立山博物館]の奥澤学芸課長、看護師の舟川様に講師として参加していただくとともに、国立登山研修所、富山県教育委員会をはじめとする、多くの関係の皆様にご協力いただき、夏の酷暑の中でしたが、無事、実施することができました。改めまして、関係の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

さて、そのような中、本事業で得た知見を広く普及・啓発することを目的に、関係者のご協力のもと、本報告書を作成させていただきました。本報告書が、青少年教育施設をはじめとする全国の青少年教育関係者の皆様の活動の参考になりますように、ひいては青少年の体験活動の推進の一助になりますことを祈っております。

国立立山青少年自然の家 所長 金子 泰久



## 概要

本キャンプは、富山県の雄大な自然にふれながら、海拔0m～3,000mを自力で踏破するキャンプである。10日間を「助走・ホップ・ステップ・ジャンプ(未来へジャンプ)」の4段階に分け、各段階での目標を掲げながら野外炊事、森の遊び場づくり、自転車、登山などの様々な活動に挑戦した。「①仲間との絆を深めながら達成感を味わい、課題解決力を育むこと、②小学生と中学生の異年齢による集団において、長期間、様々な人と関わりながら活動に取り組むことで主体性や社会性を養うこと、③豊かで自立した人格形成の基礎を培うこと」を目指して実施した。

## ねらい

- 雄大な自然の美しさや厳しさを体験すること(チャレンジ)で、豊かな心を育む(チェンジ)。
- 自分の課題に挑戦(チャレンジ)し、できる自分・新しい自分になる(チェンジ)。
- 仲間とともに、つながりを大切にして活動に取り組むこと(チャレンジ)で、課題解決力と主体性、社会性を伸ばす(チェンジ)。

## 立少の仕掛け

今年で16回目を向かえる本事業は、立山青少年自然の家を代表する夏の事業である。過去の同事業では自転車行程や登山行程のルートを変更したり、全体の宿泊数を変更したりしながらよりよい事業を目指して工夫を重ねてきた。そこで今回はこれまでの課題や成果を参考に、ねらいの達成に向けて、以下3つの仕掛けを用意し、立少にしかできない事業を目指した。

1

プログラムの  
構成

2

意図的な  
課題の提示

3

ボランティアの  
育成



# CONTENTS

はじめに ————— P01

概要 ねらい ————— P02

立少の仕掛け① ————— P03-06

立少の仕掛け② ————— P07-08

立少の仕掛け③ ————— P09-10

体験活動を企画・運営するために  
私たちが大切にすべきこと — P11-12

保護者からのエピソード ————— P13

結びに代えて ————— P14

## 期 日

- ①ボランティア研修
  - ・令和6年7月11日(木)【オンライン】
  - ・令和6年7月20日(土)～7月21日(日)
- ②事前説明会
  - ・令和6年7月15日(月・祝)
- ③本キャンプ
  - ・令和6年8月4日(日)～8月12日(火)

## 参加者

- ・小学5年生～中学3年生までの18名

## 班編成

- ・3班編成(各班男女混合の6名)

# プログラムの構成



## 1 「参加者に見通しを！」

今年度の新たな取組として、10日間の目指す高まりの段階（助走・ホップ・ステップ・ジャンプ）を設定した。これによって、子供たちは何気なく10日間を過ごすのではなく、10日間の立ち位置を感覚的に掴みながら活動を進める姿を目指した。また、日々のねらいをしおりに明示し、朝晩の班タイムで確認することによって、子供たちが見通しをもてるようにした。

## 2 「黄金の2日間！」

誰でも最初は不安と緊張で胸がいっぱいである。そこで、子供同士のコミュニケーションが必要なゲーム要素を取り入れた仲間づくりのプログラムを詰め込んだ構成にした。これによって、参加者同士の距離が一気に近づき、子供たちが主体的に活動に取り組む姿を期待した。

## 3 「リフレッシュデーの設定！」

キャンプ中盤では、キャンプ初日から2日目までの緊張感と、3日目の約40kmにも及ぶ自転車活動から一気に疲労が溜まる。そこで、4日目と5日目は心や体を休める日として、リフレッシュデーを設定した。ゲレンデでの楽しいアクティビティや立山の歴史について知る時間を設けることで、これまでの活動を落ち着いて振り返り、考える時間も十分に取ることができる。そして、子供たちが心身共に万全な状態で山行程に備えられるようなプログラム構成を仕組んだ。



## 日程

### ・ボランティア研修

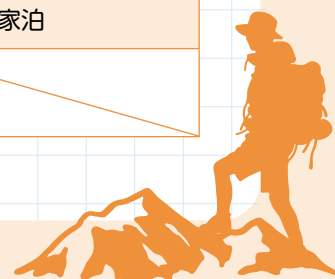
日付	午前	午後	夜
7月11日 (木)			<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティア顔合わせ</li> <li>・アイスブレイク内容検討</li> </ul>
7月20日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自転車行程下見 浜黒崎海岸～常願寺公園～あるぺん村～山野スポーツセンター</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・細案読み合わせ</li> <li>・安全管理研修</li> </ul>
7月21日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登山行程③下見 室堂～一の越～雄山～大汝～一の越～室堂</li> </ul>		

### ・事前説明会

日付	午前	午後	夜
7月15日 (月・祝)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日程概要説明</li> <li>・持ち物説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康状況聞き取り(保護者)</li> <li>・アイスブレイク(参加者)</li> </ul>	

### ・本キャンプ

段階	日付	午前	午後	夜
助走	8月4日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出会いの集い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>・野外炊事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>※自然の家泊</li> </ul>
	8月5日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マウンテンバイク練習</li> <li>・立山ジョイフレンド</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森の遊び場づくり</li> <li>・焚火</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>※自然の家泊</li> </ul>
ホップ	8月6日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自転車行程 浜黒崎海岸～常願寺公園～あるぺん村～山野スポーツセンター</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>※山野スポーツセンター泊</li> </ul>
	8月7日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゲレンデアクティビティ (あわすのスキー場)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歩行行程 あわすのスキー場～登山研修所</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>※登山研修所泊</li> </ul>
	8月8日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立山開山についての講話</li> <li>・カルデラ砂防博物館見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まんだら遊苑見学</li> <li>・立山駅散策</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>・パッキング</li> <li>※登山研修所泊</li> </ul>
ステップ	8月9日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登山行程① 千寿ヶ原～美女平～弘法～弥陀ヶ原</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>・星空観察</li> <li>※立山荘泊</li> </ul>
	8月10日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登山行程② 弥陀ヶ原～天狗平～室堂</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>※室堂山荘泊</li> </ul>
ジャンプ (未来へジャンプ)	8月11日 (日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登山行程③ 室堂～一の越～雄山～大汝～一の越～室堂</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>・星空観察</li> <li>※室堂山荘泊</li> </ul>
	8月12日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室堂散策</li> <li>・班タイム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファイナルパーティ準備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファイナルパーティ</li> <li>※自然の家泊</li> </ul>
	8月13日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・班タイム</li> <li>・別れの集い</li> </ul>		







## 助走

班の仲間とのつながりをつくる

### 8月4日(日)

ねらい: キャンプネームで呼び合う。

- ・ 出会いのつどい
- ・ オリエンテーション(しおり読み合わせ)
- ・ 班タイム(アイスブレイク、リーダー決め、班の目標や円陣ポーズ決め、班旗の作成、パッキング)
- ・ 野外炊事(カレー)
- ・ 班タイム(振り返り、班旗の作成)

### 8月5日(月)

ねらい: 役割分担と作戦会議を大切にする。

- ・ 自転車練習
- ・ 立山ジョイフレンド
- ・ 森の遊び場づくり
- ・ 焚火
- ・ 班タイム(振り返り、班旗の作成)
- ・ リーダー会議



### スタッフの基本姿勢

- ・ 勇気を出して参加したことに寄り添いながら、笑顔で迎え入れる。
- ・ 子供たちの緊張が和らぐように、スタッフが積極的に関わる。
- ・ 班タイムの場面では、各班のボランティアリーダーが中心となって行うが、キャンプ後半には子供たちだけで進行することを意識して、内容の見通しをもたせながら行う。

立少の仕掛け② 意図的な課題の提示 ▶▶

①「リーダーって何だろう？」



## ホップ

班の仲間とのつながりを深める

### 8月6日(火)

ねらい: 互いに声を掛け合い、ゴールを目指す。

- ・ 自転車行程(浜黒崎海岸~常願寺公園~あるペン村~山野スポーツセンター)
- ・ 班タイム(振り返り、班旗の作成)

### 8月7日(水)

ねらい: 立山の自然を体で感じる。

- ・ ゲレンデアクティビティ(大型ブランコ、大型トランポリン、4輪バギー、ヤギとのふれあい)
- ・ 歩行行程(あわすのスキー場~登山研修所)
- ・ 班タイム(振り返り、班旗の作成)

### 8月8日(木)

ねらい: 立山を知る、立山への興味を深める。

- ・ 立山開山についての講話(立山博物館学芸課長)
- ・ 立山カルデラ砂防博物館見学
- ・ まんだら遊苑見学
- ・ 立山駅周辺散策
- ・ 班タイム(振り返り、班旗の作成)



### スタッフの基本姿勢

- ・ 気象情報や交通情報に注意しながら、安全確保を最優先する。
- ・ 子供同士での関わりが増えるように、スタッフが介入する割合を減らしていく。
- ・ 班タイムの場面では、互いが本音で話し合えるように、各班のボランティアリーダーがパイプ役となって話を引き出していく。

立少の仕掛け② 意図的な課題の提示 ▶▶

②「本音で話せる仲間になっている？」

Toyama-bay  
START  
above sea level 0m



~2450m



~3015m



## ステップ

仲間とのつながりを  
感じながら登る



## ジャンプ

仲間とつながり、みんなで  
ゴールを目指す

### ● 8月9日(金)

ねらい: 励まし合いながら登る。

- ・登山行程①(千寿ヶ原~美女平~弘法~弥陀ヶ原)
- ・班タイム(振り返り、班旗の作成)

### ● 8月10日(土)

ねらい: 前向きな言葉をかけ合いながら登る。

- ・登山行程②(弥陀ヶ原~天狗平~室堂)
- ・班タイム(振り返り、班旗の作成)

### スタッフの基本姿勢

- ・気象情報に注意しながら、安全確保を最優先する。
- ・子供同士での関わりの中で、互いを認め合ったり、励まし合ったりする声かけを称賛し、子供たちの自己肯定感が高まるようにする。
- ・班タイムの場面では、子供たちだけで進行するが、話が逸脱したり、停滞したりした場合は適切にスタッフが助言する。



立少の仕掛け② 意図的な課題の提示▶▶

③「みんなで！」

### ● 8月11日(日)

ねらい: みんなで安全にゴールを目指す。

- ・登山行程③(室堂~一の越~雄山~大汝~雄山~一の越~室堂)
- ・班タイム(振り返り、班旗の作成)

### ● 8月12日(月)

ねらい: 立山の自然を存分に味わう。

- ・室堂散策
- ・活動のまとめ(個人の振り返り)
- ・班タイム(振り返り、班旗の作成、ファイナルパーティの準備)
- ・ファイナルパーティ

### スタッフの基本姿勢

- ・子供たちの思いをしっかりと受け止め、共感することで今後の自信につながるようにする。



立少の仕掛け② 意図的な課題の提示▶▶

④「意図的な課題の未提示」

## 未来へジャンプ

仲間の思いを聞き、  
自分の思いを語り、  
今後の決意を固める

### ● 8月13日(火)

ねらい: 仲間の思いを聞き、自分の思いを語り、今後の決意を固める。

- ・班タイム(振り返り、班旗の作成)
- ・別れの集い(スライド上映、達成証授与)

### スタッフの基本姿勢

- ・各班のボランティアリーダーが達成証を渡す際は、キャンプのねらいに対して評価できる点を具体的なエピソードを添えて渡す。
- ・10日間の頑張りがキャンプと共に終了するのではなく、今後の生活に生かせるようなメッセージを伝える。



Tateyama  
GOAL  
above sea level 3015m



### ① 「リーダーって何だろう？」

班のリーダーが、自覚をもってリーダーの役割を果たしていくために、2日目のリーダー会議で、意図的に「理想のリーダー像について」考える場面を設定した。

#### 《子供たちの様子から》

1日目の班タイムでは、子供同士の話し合いでリーダーを決める。キャンプに参加する子供たちの多くは積極的であり、立候補により賛同を得てリーダーになるケースがほとんどである。しかし、2日ほど経つと、上手くまとめられずに困っていたり、具体的なリーダーの役割が見えていなかったりする姿が多い。そこで、2日目の夜にリーダー会議を行い、「リーダーって何だろう」と問いかけ、議論しながら現状の困り感を共有する場を設けた。その際、スタッフはファシリテーターとして会議を支援した。

Aは、中学3年生として、今回のチャレチェンで「下級生をまとめ、リーダーとしての力を身に付けたい」という思いをもって応募した。自分のめあてを「最後までみんなをまとめる」とし、これまであまり経験してこなかったことにチャレンジしようという思いをもって出会いのつどいを迎えた。

Aは、リーダーとなり、リーダーとして自分にできることをしようとしたり、班の仲間の様子を見て活動を進めたりしていた。1日目の振り返りには、班の仲間一人一人のよかったところを書き出したり、それを仲間に伝えたりしていた。また、2日目のジョイフレンドでは、班の課題解決のために自分の意見を伝え、森の遊び場づくりでは、高いところの作業を自分から引き受け、周りの仲間にたくさん声かけをする姿があった。「昨日はギスギスしているように感じたけれど、今日は居心地がよかった。仲がとても深まったからだと思う」と振り返っていた。最上級生として、リーダーとして、班をまとめることができるようになりたいという思いをもち、班の仲間と向き合っていたが、リーダー会議において、班の中で自分の思いが伝わらないことや、どうすれば班をまとめられるかということについて、悩みを共有した。その後、理想のリーダー像を考えながら、班のためにできることに積極的に取り組む姿が見られた。

### ② 「本音で話せる仲間になっている？」

登山行程に臨むにあたり、本音で自分の思いを語り合える関係性であることが、個人の成長、班の成長にもつながると考える。人間関係の様々なトラブルをきっかけにしてつながりを構築したこともあったが、今年度は、大きなトラブルが起きることなく、登山行程前日を迎えた。そこで、子供たちに「本音で話せる仲間になっている？」と揺さぶりをかけることで、班の子供たちのつながりをより強固なものにすることをねらった。

#### 《子供たちの様子から》

3日目を終えて心身共に疲労困憊だった子供たちは、2日間の休養日を経てリフレッシュを図った。6日目からは、3日間かけて約30Kmの道のり、標高差2540mの登山を行うことになっている。そこで、スタッフから「明日からはさらに仲間同士の支え合いが重要。本音で話せる仲間になっている？今考えていることや困っていることを素直に話してみよう。」と問いかけた。意図的に問題提起することで、子供たちには変化が見られた。振り返りではその日の活動でよかった姿を具体的に伝え合い、事業に参加した目的を話し合う姿も見られた。

Aの班では、Aが中心になって「何か不安に思っていることや言いたいことは何でも言ってほしい」と進め、始めにAがこれまでの班の様子で感じていることを語った。「すぐくたまに乱暴な言葉があるのが気になっていて、乱暴な言葉に乱暴で返しても、何も解決しないと思う。乱暴な言葉があったとしても、優しい言葉で返してあげたら、相手も優しくなれると思うから、乱暴な言葉は控えたいなと思う」と。それに続いて、登山行程で互いに気を付けることを確認したり、これまでのよかったことや嬉しかったことを本音で語り合ったりした。Aの振り返りには「みんな





の本音を聞いて本当によかった。みんなは、登山行程に向けて、思っていたよりも不安に感じていた。だから、できるだけ話を聞いてあげられるようにしたい」と登山行程に向けて気持ちを高めた。

Aは、よりよい班を目指して、自分の素直な思いを丁寧に仲間に伝えることで、班の仲間も安心して本音で語り合える雰囲気をつくり出していた。リーダーとして、Aがみんなに優しく接し、安心感を与え、班全員が自分らしく、本音を語るができる温かい空気をつくっていた。この「信頼関係の再構築」が子供たちにとって大きくプラスの影響をもたらした。

### 3 「みんなで！」

山頂を目指す前に、再度、登頂が目的ではなく、「チームのつながりを感じる」ことがゴールであると伝えた。大切なことは「みんなで」山頂を目指す歩みを進める過程であることを確認することで、目的意識をしっかりとって進められるようにした。

#### 《子供たちの様子から》

2日間の登山行程を終えて、いよいよ山頂アタックの前夜。自然と士気が高まる中、明日のねらい「みんなで安全にゴールを目指す」を確認した。さらにスタッフから「どういう意味が分かるかな？」と問いかけると、子供たちからは「自分の安全を考えるだけではだめ」や「せっかくここまで来たのだからみんなでゴールしなければ意味がない」などの発言を聞くことができた。また、キャンプのはじめにも伝えていた、「登頂が目的ではなく、チームのつながりを感じる」ことがゴールであると伝えることで、高い仲間意識をもって進めることができた。

8日目は、富山県最高峰の大汝山 3015mを目指して、早朝4時に室堂山荘を出発した。まだ暗い中からの登山で、ヘッドランプを装着し、登山道の溝に気を付けるよう伝えながら歩いた。休憩のときには、体温調節の声かけや行動食の摂取の確認など、仲間を思い、互いに細やかに声をかけ合って歩き進めた。そして、全員が無事に大汝山山頂の3015mにたどり着くことができた。暗さ、寒さを感じながら、だんだんと明るくなり、歩いてきた道のりが見えるようになり、雄大な立山の景色や雲海、空の明るさなど、初めての光景に子供たちは感動していた。

「これまでつらいこともあったけれど、みんなの明るい声かけや楽しい会話で、あっという間に終わったように感じたし、つらかったよりも楽しかった笑顔の思い出がいっぱいで嬉しい」「大汝山の山頂でみんなが笑顔でいたことが成長のあかしだと思う」「班のめあてにしていたように、みんなで元気に協力して頂上まで行くことができて嬉しかった」など、ここまでの歩みを思い返しながらか、達成感を味わった。これまでの道のりや今日のがんばり、仲間とのつながりを実感しながら登頂し、山頂では、満面の笑顔で大満足の様子だった。

### 4 「意図的な課題の未提示」

キャンプ最終盤では、これまでの子供たちのつながりを信じ、意図的に明確な課題を提示せず、自分たちで作り上げることをねらった。子供たちは、これまでのチームとしてのつながりを大切に、ファイナルパーティを自分たちだけで計画、運営した。

#### 《子供たちの様子から》

登山行程を終えた日、「あと2日間で大切な仲間のよいところをもっとたくさん見つけて、自分でも実行していきたい。あと少しの時間を大切に過ごしたい」「残りの日数は少ないけれど、みんなとつながり、最高のゴールを迎えたい」など、さらに仲間とつながることを自分たちの課題とし、残りの2日間にも取り組もうとする姿が見られた。また、参加者みんなで作り上げたファイナルパーティを終え、「最後までみんなとつながることを忘れずがんばった」と振り返るなど、みんなとつながり、みんなと一緒に作り上げるパーティだからこそ、楽しい時間を過ごすことができた。

さらに、最終日最後の班タイムでは、これまでの自分たちを振り返りながら、これからどんな自分になっていきたいかというそれぞれの思いや決意を語り合ったり、班旗に書いたりした。これからは、一人一人が自分の生活の中での、「チャレンジ&チェンジ」が始まることを自覚することができた。自らの課題を自分で見付け、解決に向かおうとする力を身に付けることができた。



## 3

## ボランティアの育成



## ①「長期キャンプには波がある！」

日程が長期に渡れば、それだけ子供たちの心身にも調子の波が出てくる。そこで、事前研修において、ボランティアに「10日間あれば2回は気持ちが沈む場面が来る。その時を成長のチャンスだと思うようにしましょう。」と伝えた。これによって、実際に班としてうまくいかないことやトラブル等があったとしても、右往左往することなく落ち着いて対処できるような心構えをもたせた。

## ②「ななめの関係を大切に！」

長期キャンプにおいては、子供同士（横）のつながりや職員（縦）のつながりは大切であるが、最も重要なのが一番近くで子供たちを支えるボランティア（ななめ）である。このななめの関係の重要性を研修し、ボランティアがかかる言葉が子供たちにとって勇気や希望、自信に大きく変わっていくことを自覚させた。さらに、出会いの場面では「よく来たね!」、話し合いの場面では「よく考えたね!」など、子供たちの気持ちを受け入れてあげる受容の姿勢をもたせるようにした。

## ③「安全管理のプロへ！」

どの活動においても安全への配慮は必要となるが、特に自転車行程や登山行程では重大な事故につながる可能性がある。そのことを理解し、配慮ができるよう、事前研修では自転車行程と登山行程の下見を行った。登山行程の下見では、登山ガイドから登り方や下り方のポイントについて具体的に詳しく学ぶことで、当日の子供たちへの声かけに生かせるようにした。



## 1班 大学生 男子ボランティア

今回のキャンプでは「班の居場所づくり」に力を入れました。キャンプ初日では、他の班に行ってしまう子供がいて、班の居場所づくりが上手くいってないと感じたからです。しかし、毎日の振り返りで子供たちは本音で話し合い、団結力が向上していきました。私自身も何か別の方法はないか悩みましたが、ボランティア同士でじっくり話し合い、解決に向かうことができました。その結果、様々な行程の中で班がまとまり、ずっと一緒に行動することができました。特に、室堂ターミナルのお土産を買う時間には、リーダーを中心に班全員で集まりアイスを食べようとしたことが印象に残りました。些細なことかもしれませんが、初日の様子からは班全体で何かをしようとする姿は考えられなかったもので、とても嬉しく、感動しました。



## 1班 高校生 女子ボランティア

私は、昨年は参加者として参加し、今年はボランティアとしてこのキャンプに参加しました。参加者とボランティアとしての違いに不安に感じ、さらに私たちの班は最初がすごくバラバラで、本当に最後はまとまるのかなと心配し、怖くも感じました。しかし、日が過ぎるにつれてみんなのよい所がたくさん出てきて、他の班の子供から「すごくまとまっていて羨ましい」と言われたこともありました。一人ひとりの成長の仕方は違うけれど、10日間一緒にいたからこそ分かる成長を実感し、ボランティアになるってこんな気持ちなんだと思いました。また、経験の少なさから悩んだり落ち込んだりすることもありましたが、逆に子供たちから声をかけてくれたことで私の心が軽くなり、笑顔になれたので、とても感謝しています。またボランティアとして活動する機会があれば、今回のキャンプを生かして頑張りたいです。







## 2班 大学生 女子ボランティア

私がこのキャンプで学んだことは「子供たち自身がつ力の大きさ」です。私はこれまで子供理解を通じて子供や班の課題を見つけ、それに気付かせ、子供たちで課題の解決方法を考えられるようにすることを大切にしていました。しかし、5日目の振り返りの場面では本音で話し合っている子供たちに耳を傾けると、子供たち自身で既に課題を見つけており、その解決方法も子供たちだけで考えることができていました。この本音で話し合った振り返りでは、子供たち一人一人が心に抱いていた思いや仲間への思いやりの気持ちなども知ることができ、本当に嬉しく感じました。同時にボランティアとしてどこまで介入したらいいのか、ななめの関係の難しさを感じました。1つのチームとして班をつくり上げていくために、子供同士で本心から話し合う場をつくることの重要性を理解することができました。



## 2班 高校生 女子ボランティア

ボランティアとして初めての活動だった私は、10日間の中で子供たちを成長させることができるのかがとても不安でした。キャンプが始まると、それぞれの個性が強く、波があり、話し合いがまとまらないこともありました。5日目の振り返りでは「本音で話し合おう」というテーマで互いに考えていることを伝え合ったところ、相手の言動を否定せず、考えを受け入れる姿が見られました。その日以降、毎晩の振り返りにはボランティアがなるべく介入しないように見守るようにしました。それでも「声かけが少ない」や「班としてのまとまりが足りない」など、自分たちで課題を見つけ、その解決に向けて意見を出し合うことができていました。今回のキャンプでは、子供たちはちょっとしたきっかけで、大きく成長（チェンジ）することができるのだと学ぶことができました。



## 3班 大学生 男子ボランティア

全員が同じ方向を向いて様々なチャレンジを乗り越える班の雰囲気が、班の垣根を超えて他の班にも良い影響が移ったことが心に残りました。子供たちの成長に携わるためには、ボランティアと参加者の信頼関係が必要不可欠であると考えていましたが、その信頼関係を構築する中で実際に自分自身の姿勢や活動に対する向き合い方によって大きく子供たちは変わることを学びました。また、子供たちに考えさせる機会（時間や活動に対する姿勢や班の方針）を増やしたことから責任が子供たちの中で芽生えたように感じました。子供たちの成長の種まきをすることが教育事業をする中でボランティアができることだと考えていたため、もっと深く考えてこれから実行に移していきたいと感じました。



## 3班 高校生 女子ボランティア

私はこのキャンプで子供たちの成長をととても感じる事ができました。私は4日目から合流したのですが、事前説明会と比べて表情がまるで別人のように変わっていることに驚きました。これは仲間と共に自転車行程を終えたことで、仲間と何かを成し遂げる楽しさや感動を子供たちが感じ、自分に自信がついたからだと思います。また、登山行程では、「周りの関係してくださった方に感謝してゴールしたい」と言っていたことが印象に残っています。私では気付かなかったことに子供たちが気付いていて、周りの大人をよく見ているからこそ、たくさんの発見をしているのだと思いました。私自身も大きく成長することができたこの経験を大切に、また新たなことにも挑戦していきたいと感じました。



## 3班 大学生 女子ボランティア

私は「子供たちの成長を手助けしたい」という思いから今回のキャンプに参加しました。始めは何も分からなかったのですが、事前研修等で子供との接し方や考え方を学び、子供たちにしっかりと寄り添うことを意識しました。子供たちは単独行動をとったり、自分の思いを伝えられなかったりと様々な課題をもっていました。じっくりと話しながら寄り添うことができました。日に日に変わっていく姿には本当に驚かされ、7日目には子供同士での声かけや班の雰囲気、表情など、褒めるところしか見つからなかったです。私にとってこの期間は、人との関わり方や声のかけ方を今までの人生で一番考え続けた10日間でした。そして、仲間という存在の力強さ、有難さも感じました。これらの学んだことを軸としてもち、これからの人生にも生かしていきたいです。



# 体験活動を企画・運営するために 私たちが大切にすべきこと

「チャレンジ&チェンジ！2024－海拔0m～3,000mへの挑戦－」から



富山国際大学子ども育成学部 教授 松山 友之

## はじめに

本事業は、体験活動としてのスケールの大きさやその活動内容の豊富さは他に例を見ないものである。「助走・ホップ・ステップ・ジャンプ」の4段階に分け、異年齢の参加者が様々な体験活動のねらいの達成に取り組んでいる。具体的な活動の実施そのものからも工夫すべきことなど学ぶべきことが多い。

ここでは4段階の様々な体験活動を通して、参加者がどのように成長し、何を身に付けたかを評価データから分析し、体験活動を企画・運営するためには何が大切かを明らかにしたい。

## 1. 各段階及び体験活動によって育まれる観点

評価については各段階及び体験活動によって育まれる観点を以下の3点に絞り参加者の自己評価を4段階で評価した。

段階	主な活動	①主体性	②社会性	③人間性
助走	出合いの集い（野外炊事）	◎	◎	○
	仲間づくり（立山ジョイフレンド）	◎	◎	○
ホップ	自転車行程（浜黒崎海岸～山野スポーツ）	○	○	◎
	あわすの（ゲレンデアクティビティ）	●	◎	○
ステップ	博物館見学（カルデラ砂防、まんだら遊苑）	○	○	●
	登山行程①（千寿ヶ原～弥陀ヶ原）	○	◎	◎
ジャンプ	登山行程②（弥陀ヶ原～室堂）	○	◎	◎
	登山行程③（室堂～大汝～室堂）	○	◎	◎
	まとめ（ファイナルパーティ）	◎	◎	○

①主体性  
「自分の成長のために考えて行動できたか」

②社会性  
「仲間と協力して力を合わせて行動できたか」

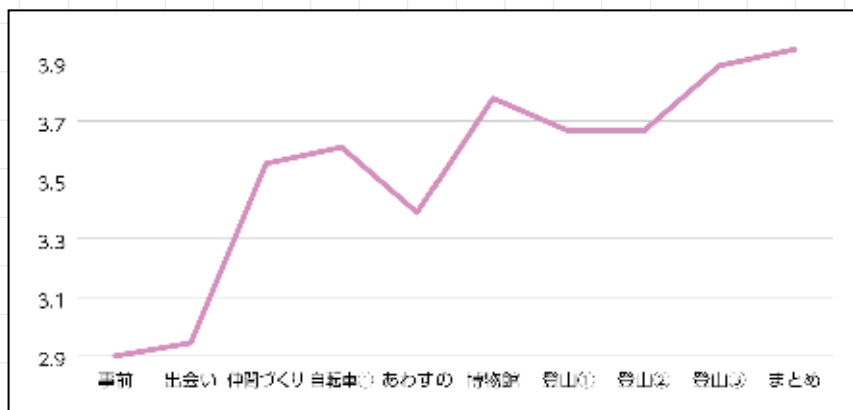
③人間性  
「課題に対して粘り強く取り組んだか」

表 各段階及び体験活動での3つの観点を重み付け（◎重点）

全体に②社会性を重点としたプログラムであり、助走の段階は「黄金の2日間」でコミュニケーションや主体性に重点が置かれ、ホップの段階は「リフレッシュデー」である。さらにステップ・ジャンプと活動の強度を増し人間性にも迫っている。

## 2. 評価データからの考察

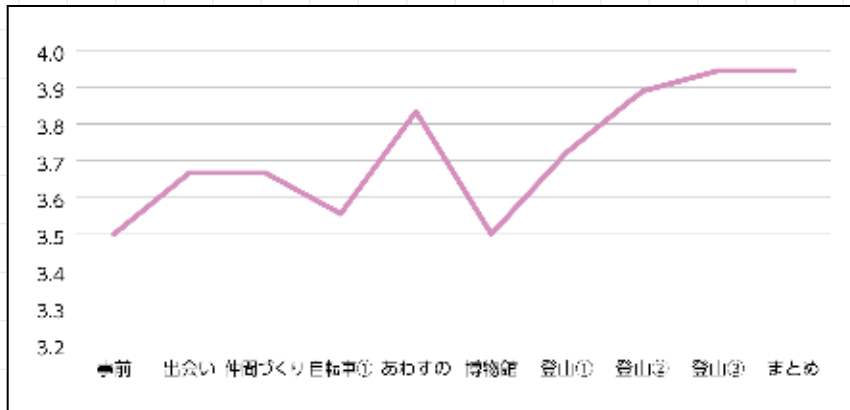
### ①主体性「自分の成長のために、考えて行動できたか」



2日目で大きく伸びていることから自ら進んで行動するには時間が必要である。また、主体性はすぐに発揮されるものではなく、参加者の自らの課題への気付きなど十分な準備が必要である。

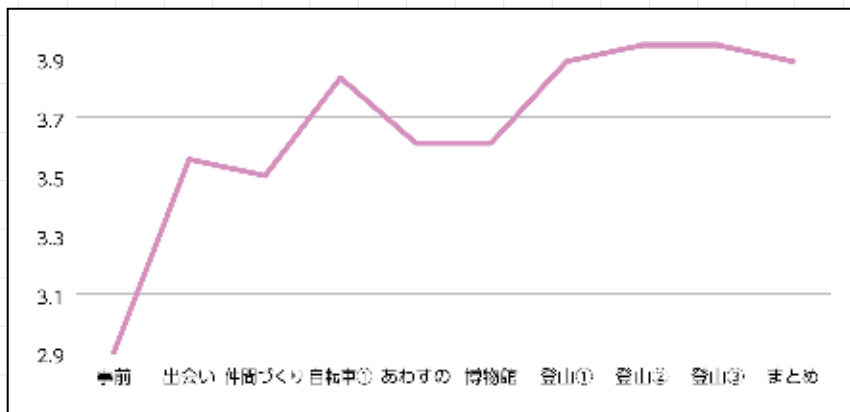


## ②社会性「仲間と協力して力を合わせて活動できたか」



活動の中で、常に参加者が意識したのは、仲間との協力ではないだろうか。また、事前の値も高く参加者の期待もそこにあったと考えられる。4日目の活動は、用意されたものであっても明確に協力することが必要とされるものだったと考えられる。登山については次第に高まっていくことから、困難に打ち勝って協力することに参加者が気づき、最も達成された観点となっている。

## ③人間性「課題に対して粘り強く取り組んだか」



1日目の出会いから急激に伸びたのが「粘り強く取り組んだ」という人間性の観点である。各段階で、徐々に精神的にも肉体的にも粘り強く活動することが求められ、巧みに参加者が実感を伴って理解できるように構成されている。特に自転車や登山は、参加者にとって日常生活にはない大きな困難を乗り越えることで大きな達成感と満足感が得られた。このように重層的に体験活動が用意され仕組まれていることが効果的であった。

## 3. まとめ

体験活動はその名の通り「活動ありき」の傾向が強い。しかし、本事業の考察から、活動の前にその活動を支えるポイントが見えてくる。

### ①参加者の自己の課題への気づきや準備を大切にすること

参加者が主体的に行動するためには、「活動ありき」ではなく、自己の課題や他者との関係に気づき、準備する段階が大切である。今回の助走での人間関係づくりやホップで一旦落ち着かせることは、参加者の実態を把握し適切な指導を行う上でも効果的である。

### ②社会性や人間性の育ちを軸に体験活動を仕組むこと

参加者が多様な背景をもつ以上、参加者が共通に課題となる社会性や人間性が高まるように体験活動を重層的に計画することが大切である。さらに、参加者が人と人とのつながりを軸に社会性や人間性の育ちを実感できる体験活動を意図的・計画的に仕組むことが必要である。

その意味で、この10日間の計画と実践を見ると、今後の体験活動に活かせる点が多くあり、改善したくなるはずである。次に活かせることが挑戦的な取り組みの使命であると考えたと改めて本事業の素晴らしさが見えてくると考える。



# 保護者からのエピソード

(事後アンケートより)



- 子供の成長として感じていることは、人とのコミュニケーションの取り方が上手になったこと、難しい課題にもチャレンジするようになったことです。初めて会った子や小さい子に、自分から話かけ、遊んでいる様子も見られます。また、「少し難しいかもしれないけれど、やれるだけやってみよう」と取り組むようになりました。これからも、「やってみたい」「やってみようかな」という本人の思いを後押しし、挑戦させていきたいと思います。



- 優しいお兄さんお姉さんボランティアの方と接して、その姿に憧れ、手本にしているように思います。それは、娘が学校で下学年の子と接したり、クラスでみんなが黙っている場面で「そんな時こそ!」と思い、挙手してみたりしているようです。今回のチャレチェンも含め、イベントに参加する度に、非日常の自然体験の中で、初めて会う人と仲間になり、その後、別のイベントでの再会を喜んだり、学校の行事で偶然会って声をかけたり、手を振り合ったり、新たな出会いに喜びを感じるようで、初めてのことに臆することなくやってみる気持ちは更に育ったように思います。



- 立山登山や自転車行程の体力的に辛い試練を乗り越える事で得られる心の成長の他に、長期間一緒に行動を共にする仲間がいるからこそ、周りからいい影響を受ける事で得られる心の成長が、後々娘にとって残るように思います。ボランティアの方に、本人が頑張ったことを認めてもらい、無意識にやっていた事を褒めてもらえたこと、それが自分の良さなのだと認識できたことが自信につながったと思います。冬の晴れた日に、きれいに立山が見えると、「あそこに登ったんだ。自分ってすごいと思う」と言います。チャレチェンは、成長のきっかけになり、勇気が必要な時や困った事がある度に立山を見て、班のみんなを思い出し、行動に移してくれると思います。



- 難しい場面に出会ったときも感情的にならず、一旦立ち止まって考えることができるようになった気がします。また自分を飾らず、自然体で仲間と接することが出来るようになりました。届いたビデオを観て振り返り、ますますチャレチェンでの経験がしっかりと彼の根っこに備わったようで、頼もしいです。







## 結びに代えて

全国的にみても稀な長期キャンプである「チャレンジ&チェンジ!」。その後半の登山行程をガイドとして同行させていただくようになって今年で10年になります。私にとっては、お盆=チャレチェン、夏山最盛期を締めくくる節目のガイド業務です。

様々な事業が縮小傾向にあり、負担の少ない方へと舵を切るのが普通の世の中で、職員やボランティアスタッフが周期的に入れ替わり、数年で運営メンバー全員が変わってしまう状況の中で、この事業を継続していくことは当たり前のことではないと思います。ある年の主担当の方の、「チャレチェンが終わった日から、来年のチャレチェンの準備が始まる」という言葉を思い出します。どれだけの準備と努力の上にこの事業が成り立っているかを改めて感じさせられました。

本番が近づいてきた7月、ボランティア研修では登山の下見を行います。引率側の視点をもって山を歩いてもらい、注意すべきポイントの最終確認をします。そしていよいよ本番を迎えることになります。

「参加する」という大きな決断をした小学校高学年から中学生の子供たちは、立山の大自然という最高のフィールドを舞台に、かけがえのない日々を仲間たちと過ごします。出だしの材木坂の急登でへばってしまった猛暑の日。流星群の空の下、ヘッドライトを灯し一の越を目指した日。季節外れのみぞれが混じる大汝山の山頂で、震えながら引き返すことになった日。うまくいってもいなくても、立山の感動体験はたくさんのことを教えてくれます。そして、海岸線から立山山頂を目指した10日間の道のりは、近道は存在しないということを嫌というほど教えてくれます。

このような素晴らしい事業に長く関わらせていただき、心より感謝いたします。当時参加した子供たちは今どうしているだろう。当時の職員、ボランティアは今どこにいるだろう。ガイドとして日々立山を歩きながら、ふとあの夏の表情が浮かんできます。

立山ガイド協会・登山ガイド 大塚 憲一



# チャレンジ& チェンジ! 2024 報告書



## 講師

富山国際大学 子ども育成学部長 松山 友之 氏  
国立登山研修所 専門職 黒川 和英 氏  
立山ガイド協会・登山ガイド 大塚 憲一 氏  
富山県[立山博物館] 学芸課長 奥澤真一郎 氏  
看護師 舟川 絢子 氏

## 共催・後援・協賛・協力

### 共催

(独)日本スポーツ振興センター 国立登山研修所

### 後援

富山県教育委員会／新潟県教育委員会／立山町教育委員会／北日本新聞社／Net3

### 協賛(五十音順)

アサヒ飲料株式会社北陸工場／大塚ウェルネスペンディング株式会社／  
株式会社池田模範堂／かわもとスポーツ／トヨタモビリティ富山株式会社／  
日の出屋製菓産業株式会社立山本店／横山冷菓株式会社

### 協力(五十音順)

あわすのスキー場／立山あるぺん村／立山ガイド協会／立山町立雄山中学校／  
立山室堂山荘／天狗平山荘／天望立山荘／富山県立山カルテラ砂防博物館／  
富山県[立山博物館]まんだら遊苑／富山市立浜黒崎小学校／山野スポーツセンター

## 国立立山青少年自然の家 職員

所長 金子 泰久  
次長 高地 修  
主任企画指導専門職 岡本 宏一  
企画指導専門職 小池 勇作  
企画指導専門職 宮崎 旬平  
企画指導専門職 丸山 峻史  
事業推進係長 鈴木 悠仁  
事業推進係員 加藤 圭  
事業推進係員 池田 果穂  
事業推進係員 金村茉由子  
総務・管理係主任 赤井 一繁  
総務・管理係員 川田 翔平  
総務・管理係員 伴 祐輔  
事業補佐員 土池 仁美  
事業補佐員 大井 晋  
事業補佐員 竹内 潤子  
技能補佐員 藤田 清



独立行政法人国立青少年教育振興機構  
国立立山青少年自然の家

〒930-1407 富山県中新川郡立山町芦峯寺字前谷1

TEL:076-481-1321 FAX:076-481-1430

MAIL:tateyama-s@niye.go.jp HP:https://tateyama.niye.go.jp/